

相づちの「促し」効果の消失について

－現代日本語の「うん」「はい」と現代中国語の 天津方言の「ng」「a」の比較から－

羅希*
luckyrarecosmos@gmail.com

＜目次＞

- | | |
|--|--------------------------------------|
| 1. 問題意識 | 4. 相づちとしての用法 |
| 2. 研究方法 | 4.1 相づちとしての「うん」「はい」「ng」「a」
に関する考察 |
| 3. 感動詞の用法 | 4.2 なぜ天津方言の相づち「a」は「促し」効果
が消失しないのか |
| 3.1 独り言としての用法 | 5. おわりに |
| 3.2 対話場面の用法 | |
| 3.3 感動詞の「うん」「はい」「ng」「a」の
共通点と相違点の考察 | |

主題語: 相づち(backchannels)、「促し」効果(“continuer” effect)、天津方言(Tianjin dialect)、感動詞(interjection)、
メカニズム(mechanism)

1. 問題意識

本稿では、日本語と中国語の天津方言を対象として、それぞれの言語における応答系の感動詞「うん」「はい」(日本語)「ng」「a」(天津方言)が相づちとなる際の、「促し」効果が生じるメカニズムについて検討する。

相づちに関する研究は、Yngve(1970)の研究まで遡ることができる。研究者によって相づちの定義は様々だが、日本語教育、日本語を対象とする会話分析などの分野では、メイナード(1993)の「話し手が発話権を行使している間に聞き手が送る短い表現」(p.58)が最も広く認められている。また、このような短い表現は一般的に相手の発話に対する「理解」あるいは「賛成」を示し、「話の進行を促す」という効果があると指摘されている(水谷1988など)。例えば、会話においては、(1)のBのように相づちの「うん」「はい」を打つことがなけれ

* 京都大学大学院・日本学術振興会特別研究員PD

ば、話し手の発話が非常に進みにくいと言える。

(1) 相手の発話を聞いている際の相づち

A: 私の学校でね、 もう喫煙が全面禁止になってね、 …

B: うん / はい うん / はい

中国語に関しては、これまでの多くの研究結果によれば、中国語母語話者が会話する際には、日本語母語話者ほど相づちを打たない(劉1987; 呂2010; 劉他2010; Clancy et al.1996 など)とされてきたが、羅(2016, 2017)の調査から、中国語・天津方言の母語話者が会話する際に、日本語母語話者と同様に高頻度で相づちを打つことが分かった。天津方言にも、日本語の「うん」「はい」のような、感動詞類の相づち「ng」「a」が存在する。次の(2)は、それを示す例である。

(2) 相手の発話を聞いている際の相づち

A: 我的学校呀, 已经开始全面禁烟了, ……

私の学校でね、 もう喫煙が全面禁止になってね、 …

B: ng / a ng / a

この場面での相づちは、話し手の会話満足度に大きく繋がるといっても言い過ぎではないであろう。しかし、一部の場面では、相づちが頻繁に発せられると「話の進行を促す」という効果が消失してしまうこともある。例えば、次の(3)の場合、聞き手の「あなたが言っていることは分かっている」という会話に対する抵抗感をあからさまにし、「食い気味」で「もう聞き飽きた。これ以上聞きたくない」という姿勢が窺える。この場合、いわゆる相づちの「促し」効果が完全に消失したと言える。

(3) 相手の発話を早く終わらせたい際

A: 私がここまで成功したのは、学生時代からの努力と…

B: はい はい はいはい はい

一方、日本語の「うん」、天津方言の「ng」「a」は必ずしもそうではない。日本語の感動詞「うん」について、定延(2002)では、頻繁に発せられると相手の発話を早く終わらせようとする印象が生じると指摘されているが、同書の富樫(2002)でも述べられているように、「う

ん」は「はい」ほど強烈な「その話は聞き飽きた」という印象が生じにくい。中国語の「ng」¹⁾に関して、劉(2013)では、頻繁に発せられても相手の発話を早く終わらせようとする効果はないと指摘されている²⁾。さらに、天津方言の「a」は、如何に高頻度で発せられても「もう聞き飽きた。これ以上聞きたくない」という相手の発話を終わらせようとする印象は生じない。むしろ、「もう聞き飽きた。これ以上聞きたくない」という場面で、「a」が高頻度で発せられると状況的に不自然になる³⁾。

(4) 相手の発話を早く終わらせたい際

A: 我现在能这么成功, 主要是因为学生时期的努力还有……

私がここまで成功したのは、学生時代からの努力と…

B: ?? a a aa a

これは、なぜであろうか。本稿では、日本語「うん」「はい」と天津方言の「ng」「a」に注目し、それぞれの相づちによる「促し」効果が生じるメカニズムを明らかにしたうえで、なぜ「はい」が頻繁に発せられると相づちの「促し」効果が完全に消失し、「食い気味」の印象が生じる一方、天津方言の「a」はそのような印象が生じないかについて検討する。

2. 研究方法

日本語の「うん」「はい」、天津方言の「ng」「a」の相づちのメカニズムを検討する以前、それぞれの表現の感動詞としての用法の異同を明らかにする必要があると考えられる。感動詞は、1人でいるときにも発せられれば、他者と共在するときにも発せられる。この2つの場面を分けて検討する必要があるため、本稿の第3節では、それぞれの感動詞の「独り言としての用法」(第3.1節)と「対話場面における用法」(第3.2節)を観察する。また、話者がある感動詞を発する際に、意識が内面に向かう場合もあれば外面に向かう場合もある。その性質に

-
- 1) 劉(2013)で論じられた中国語共通語の「ng」は、筆者の観察によると天津方言の「ng」と大きな違いは見られない。従って、本稿では、共通語「ng」と天津方言「ng」を区別せず、記述を天津方言「ng」に統一する。
 - 2) 「ng」の頻繁さが「相手の発話を早く終わらせるかどうか」という点に関しては中国語母語話者の内部でも意見が一致しないことがあるが、少なくとも連発の「はい」のような「食い気味」や「もう聞き飽きた」といった印象がないという点では一致している。
 - 3) 「??」は例文が不自然なことを示す。以下同様。

ついて、意識が内面に向かっている場合を「自己志向性」、意識が他者に向かっている場合を「他者志向性」と呼び、「独り言としての用法」と「対話場面における用法」の両用法においてこれらの性質がどのように現れるかを観察する。

第4.1節では、比較の結果をまとめたうえで、それぞれの感動詞の特徴、さらに相づちとなる際に「促し」効果が生じるメカニズムを明らかにする。第4.2節では、本稿の問題意識、すなわちなぜ「はい」が頻繁に発せられると相づちの「促し」効果が完全に消失し、「食い気味」の印象が生じる一方、天津方言の「a」はそのような印象が生じないか、その理由の解明を試みる。

3. 感動詞の用法

3.1 独り言としての用法

本節では、それぞれの感動詞の独り言としての用法を考察する。定延(2002)は、感動詞の用法を検討する際に、「決断」と「状況受容」の2つの場面から判断するとしている。「決断」とは、話者⁴⁾が決断する際に発せられるものであり、「状況受容」は、「何らかの状況を話し手が受容しようとする際に、これに反応して発せられる」(定延2002: 96)ものである。本稿では、定延(2002)にならい、この2つの場面においてそれぞれの感動詞が発せられるかどうかを考察する。

定延(2002)によれば「うん」は「決断」と「状況受容」の両方の場面で発せられる。話者がある事柄についてあれこれ思索した後、かろうじて決断した際に独り言「うん」が発せられる。(5)は筆者の作例である。

(5) 決断の「うん」

(色々考えた後)そうしないとだめか、うん、やっぱりそうしないと。

また、状況受容の際、反応の内容によって韻律が異なるが、「感心」「あきれ」「不満」「気づ

4) 本稿における「話者」とは、何かを発話した者のことを指す。また、会話の主導権を持っている会話参加者のことを「話し手」、主導権を持っていないが相づちなどで会話に参加する者を「聞き手」と呼ぶことにする。

き」「迷い」「疑念」「納得」といった7つの場面において、独り言の「うん」あるいは「うーん」が発せられる(定延2002)⁵⁾。以下の(6)~(12)は、筆者の作例である。

- (6) 感心の「うん」
(研究方法が優れた論文を読んで)うーん! このやり方、素晴らしいね!
- (7) あきれの「うん」
(信じられないことが起こった際に)うーん! なんじゃこりゃ!
- (8) 不満の「うん」
(ゲーム機を隠された子供)うーん。
- (9) 気づきの「うん」
(使ったことのない掃除ロボットの操作を試し、やっと動かすはじめた際に)うん、うん、うん、うん、なるほど。
- (10) 迷いの「うん」
(晩御飯の材料を買いにスーパーに行った際に)うーん、大根とキャベツ、どっちがよいかな?
- (11) 疑念の「うん」
(参考書が見つからない際)うん? どこに置いていたんだろう?
- (12) 納得の「うん」
(おいしいものを食べて)うん! うまい!

一方、日本語の「はい」は、独り言で発せられるかどうかについて包括的な研究が見当たらない。そのため、ここでは先行研究で言及されていることと筆者自身の検討に基づいて考察を行う。

富樫(2002)は、独り言の「はい」として以下の例を挙げている。

- (13) はい、終わりっと。(富樫2002: 128)

(13)の「はい」は、発話に先行する文脈や動作を一段落する際に、終わりを告げるものであるため、「決断」の際の「うん」に類似していると考えられる。また、富樫(2001)では、(9)の気づきの「うん」と非常に似た例が挙げられている。

5) 定延(2002)は「うん」と「うーん」は、韻律が異なっているが、同じ形式から成しているため、同等に扱うとしている。

6) (13)と(14)の下線は、筆者による。

(14) (一人で論文を読みながら)はい、はい、なるほど。(富樫2001:34)

「はい」は「うん」と同様に、「状況受容」の際にも発せられると言える。ただし、「うん」と異なり、「はい」は発せられる文脈と韻律が限られており、「感心」「あきれ」「不満」「迷い」「疑念」「納得」などの場面における記述が見当たらない。従って、独り言として発せられる際「うん」は「はい」より多くの場面で発せられると言えよう。

「ng」は日本語の「うん」と形式的に似ており、独り言として発せられることがある。(15)~(18)は、筆者の作例である。

(15) 決断の「ng」

(色々考えて)ng, 这事就得这样办。

ng, やはりそうしないと。

(16) 迷いの「ng」

(晩御飯の材料を買いにスーパーに行った際)ngー, 今天晚上吃什么好呢?

ngー, 今夜は何を食べようかな?

(17) 疑念の「ng」

(参考書が見つからない際)ng? 书到哪里去了?

ng? 本はどこに置いていたんだろう?

(18) 納得の「ng」

(おいしいものを食べて)ng! 真好吃。

ng! うまい。

このように、天津方言の「ng」は「決断」の際にも「状況受容」の際にも発することが可能である。ただし、「ng」は日本語の「はい」と同様に、日本語の「うん」に比べて発せられる場面が限られている。

最後に、天津方言の「a」について考察する。「a」は他の3つの感動詞に比べてやや特殊であり、独り言では発せられない。(19)(20)は、このことを示した作例である。

(19) 決断

??(色々考えて)a, 这事就得这样办(やはりそうしないと)。

(20) 状況受容

??(おいしいものを食べて)a, 真好吃(うまい)!

以上のとおり、日本語の「うん」「はい」、天津方言の「ng」は独り言として発せられる一方、天津方言の「a」は独り言として発せられないことが分かった。独り言として発せられるか否かは、感動詞の自己志向性に大きく関わっている。「うん」は様々な場面で発せられるため、自己志向性が最も強いと言えよう。「はい」と「ng」は発せられる場面が限られているため、「うん」ほど自己志向性が強くないと言える。「a」は独り言として発せられないため、自己志向性がないと考えられる。

3.2 対話場面の用法

3.2.1 肯定応答として応答文の冒頭に現れる際に

本小節から、対話場面で発せられる「うん」「はい」、天津方言の「ng」「a」を比較していく。まず、肯定応答として発せられる際の、これらの感動詞の共通点と相違点を明らかにする。相手の可否質問あるいは誘い・請求に対しては、「うん」も「はい」も発せられる。(21)(23)は、命題の真偽に関する質問とそれに対する答えの対話である。(22)(24)は、誘い・請求とそれに対する承諾の対話である。(21)~(24)は筆者の作例である。

- (21) A: この大学は難関ですか?
B: うん。難しいと思いますよ
- (22) A: 今日一緒に図書館に行ってもらえますか?
B: うん。いいですよ。
- (23) A: この大学は難関ですか?
B: はい。難しいと思いますよ。
- (24) A: 今日一緒に図書館に行ってもらえますか?
B: はい。いいですよ。

(21)、(23)の話者Bの、話者Aの質問「この大学は難関ですか」に対する「うん」と「はい」は、どちらも肯定的な応答表現である。また、(22)、(24)の話者Bは話者Aの「一緒に図書館に行く」という誘い・請求に対して、「うん」あるいは「はい」を発して承諾することを表している。この場合の「うん」と「はい」の選択は質問の答えに対する自信の度合の違い(富樫2001)7)、あるいは相手への待遇性の違いを反映している(水野1988)。

7) ある事項に関する心内の情報量の違いを指す。「はい」を発する場合は、「うん」を発する場合に比べて心内にある情報量が多い。富樫(2001)は、「はい」を発する際に、話者は「高度の推論を経た」(p.36)

天津方言の「ng」も、日本語の「うん」と「はい」と同様に肯否疑問に対して答える際、または誘い、請求を承諾する際に発せられる。(25)~(30)は、筆者の作例である。

(25) A：这所大学难考吗？

この大学は難関ですか？

B：ng。挺难考的。

ng。難しいと思いますよ。

(26) A：今天能和我去下图书馆吗？

今日一緒に図書館に行ってもらえますか？

B：ng。好啊。

ng。いいですよ。

(25)の話者Bの「ng」は、話者Aの質問に対する肯定応答であり、(26)の話者Bの「ng」は、話者Aの請求に対する承諾である。

一方、「a」は他の3つの感動詞と異なっている。「a」は質問に対する肯定応答として発せられるが、場面は他の3つの感動詞より限定されている。

(27) A：这所大学难考吗？

この大学は難関ですか？

B：??a。挺难考的。

a。難しいと思いますよ。

(28) A：今天能和我去下图书馆吗？

今日一緒に図書館に行ってもらえますか？

B：??a。好啊。

a。いいですよ。

(27)で話者Aの質問に対して話者Bが肯定応答をした後「挺难考的(難しいと思いますよ)」と続ける際、「a」という感動詞は発せられにくい。(28)も、話者Aの請求に対して同意し、「好啊(いいですよ)」と言って承諾の場合、前置きの肯定応答が「a」であれば、発話の自然度が落ちる。

しかし、次の(29)、(30)の場合では、「a」の容認度は(27)(28)より高い。

と述べている。

(29) A: 这所大学难考吗?

この大学は難関ですか?

B: a. 这还用问吗?

a. それは決まっているでしょう?

(30) A: 今天能和我去下图书馆吗?

今日一緒に図書館に行ってもらえますか?

B: a. 当然没问题了。

a. もちろんです。

(29)と(27)、(30)と(28)の最も大きな相違点は、肯定応答の後の発話である。(27)での話者Bの返答は単なる命題の真偽に対する判断であり、(28)も単なる相手の誘いに対する承諾である。それに対して、(29)、(30)における話者Bの発話には「それは当然だ」あるいは「それは聞くまでもないことだ」といった強い気持ちが含まれている。このことから、話者が肯定応答をする際に、「a」が発せられるのは、相手が言及した命題・請求が話者にとっては「その情報は共有しているはず」と考えられる場面に限られていると言える。

以上の考察から、日本語の「うん」「はい」、天津方言の「ng」「a」は肯定応答として発せられることが確認できた。また、「a」は「その情報は共有しているはず」という場面でなければ不自然だが、「うん」「はい」「ng」はそのような制限がないことが分かった。この点については、命令あるいは助言に対する承諾・了解の応答でも確かめられる。(31)~(34)は、このことを示す作例である。

(31) A: 宿題をしなさい!

B: うん。

(32) A: 宿題をしなさい!

B: はい。

(33) A: 去写作业!

宿題をしなさい!

B: ng。

(34) A: 去写作业!

宿題をしなさい!

B: (うんざりし、「分かっている」という意味で)a。

(31)から(34)までの例文から、相手の命令に応じる際に、この4つの感動詞のいずれをも

発することができることが分かった。「うん」は命令の内容を理解した際に発せられるが、「うん」と応答するだけでは理解のレベルにとどまり、命令の内容を実際に行うかどうかというレベルまで含まれない。「はい」と応答した場合であれば、命令の内容の理解にとどまらず、「実行の約束」という言語行動にもなる(森山1989)。このことから、「はい」は「うん」より他者志向性が強いと言える。また、天津方言で「ng」と発せられる際は、日本語の「うん」と「はい」の両方の言語行動となる可能性がある。それに対して、「a」と応答する際には、「そのようなことは言われなくても分かっている」「その情報は共有しているはず」というニュアンスがあり、当たり前のことを命じられて不快に感じるという気持ちをほのめかしている。

3.2.2 発話の部分的、全体的な末尾に現れる際

対話場面において、発話の部分的、全体的な末尾にこれらの感動詞を発することがある。この場面において、「うん」「はい」「ng」「a」のいずれも話者の心内にある情報の取り出しの部分的、全体的完結を示すことができるが、「a」はそれだけにとどまらず、話者が「自分の発話が真であること」「対話相手もそのように思っていること」を確信しなければ、発せられにくい。また、「はい」は「ビジネスの場で真摯な態度の現れ」になりうるが、他の3つの感動詞はそうではない。

「うん」「はい」について、富樫(2002)と金田(2015)では、発話の部分的、あるいは全体的な終点を示すことができると指摘されている。その際、話者の心内にある情報の取り出しが部分的、全体的に完結したと言える。次の(35)(36)は、このことを示す例である。

(35) 一仕事終えた後のビールがうまいんだよ、うん⁸⁾。(富樫2002 : 138)

(36) 昨日お送りした資料の中にですね、ハイ。会場までの地図とですね、ハイ。行き方の書いた紙がですね、ハイ。入っていたかと思うんですよ、ハイ…⁹⁾(金田2015 : 25)

(35)では、「一仕事終えた後のビールがうまいんだよ」という発話の全体的な末尾に「うん」が現れている。(36)の発話は、「昨日お送りした資料の中に」「会場までの地図と」などの

8) 下線は筆者。

9) 下線は原文。

文節で構成されるが、文節の後に「コピュラ+終助詞」の「ですね」を加えることで、文が統語的に完成し、発話の部分的な末尾を示している。その後「はい」が現れている。これらの場面の「うん」と「はい」は、心内にある情報の取り出しはそこまでで一段落がつくことを示している。また、(35)(36)の「うん」と「はい」は、交換しても不自然ではないが、「はい」は、正式な場面で発せられ、「ビジネス場での真摯な態度の現れ」(金田2015: 25)になりうるが、「うん」はそのような効果がない。

「ng」「a」も、発話の部分的、全体的末尾に、日本語の「うん」「はい」に類似した現れ方をすることがある。次の(37)と(38)は、それを示す例である。

- (37) 工作告一段落之后的啤酒最好喝了, ng。
一仕事終えた後のビールがうまいんだよ, ng。

- (38) 工作告一段落之后的啤酒最好喝了, a。
一仕事終えた後のビールがうまいんだよ, a。

このように、「ng」「a」も心内にある情報の取り出しはそこまで一段落がつくことを示すことができる。だが、「ng」「a」には、日本語の「うん」「はい」のような待遇性の違いが存在せず、「真摯な態度の現れ」にはならない。

さらに、「うん」「はい」「ng」を発する場合、話者の発話内容に対する認知状態への制限はないが、「a」は、話者が自分の発話内容が真であることを強く確信しなければ発せられない。次の作例(39)~(42)は、このことを示すものである。

- (39) 確か日本のサッカーは韓国より成績が良かったですね, うん。
(40) 確か日本のサッカーは韓国より成績が良かったですね, はい。
(41) 好像日本足球的成绩比韩国要好吧, ng。
確か日本のサッカーは韓国より成績が良かったですね, ng。
(42) ??好像日本足球的成绩比韩国要好吧, a。
確か日本のサッカーは韓国より成績が良かったですね, a。

(39)から(42)までの4つの発話は、話者が自分の考えにさほど自信を持っていない際の例である。このような発話の末尾に、(39)で「うん」、(40)で「はい」、(41)で「ng」をつけることは自然だが、(42)で「a」をつけるのは不自然である。従って、「a」は自分の発話内容が真であ

ることを確信しなければ発せられにくいということが言える。

さらに、「a」は、話者が対話相手が自分の発話内容に同意すると確信していない場合発せられない。次の(43)~(46)は、このことを示している。

(43) あなたはそう思わないかもしれませんが、私は地球温暖化が進んでいると思います、うん。

(44) あなたはそう思わないかもしれませんが、私は地球温暖化が進んでいると思います、はい。

(45) 可能你不是这么想的, 我觉得地球温室化越来越严重了, ng。

あなたはそう思わないかもしれませんが、私は地球温暖化が進んでいると思います、ng。

(46) ??可能你不是这么想的, 我觉得地球温室化越来越严重了, a。

あなたはそう思わないかもしれませんが、私は地球温暖化が進んでいると思います、a。

(43)から(46)までの4つの発話は、話者が自分の考えが聞き手と異なっていると予測している際に発せられるものである。これらの発話において、末尾に(43)で「うん」、(44)で「はい」、(45)で「ng」をつけることは自然だが、(46)で「a」をつけることは不自然である。

さらに、発話末尾で発せられる「ng」「a」については、筆者が収集したデータ¹⁰⁾の中に、(47)(48)のような現れ方が多く見られた。

(47) 最近は割と頑張っている

1. O ng, 我觉得今年哪, 比去年好点儿了。横是大点儿了, 是[吧

2. W [ngng

3. O 学习认点儿头了。

4. W ng : [:-

5. O [那前儿,

6. W ng

7. O 有脑子, 他不用啊。

8. W ng

9. →O 这前儿倒是行, ng.

10. →W 我觉着小孩儿们现在千万别: 玩儿手机上瘾。

10) データは2016年2月に天津で収録したものである。1対1の会話7組(中中年男性の会話が3組、中中年女性の会話が3組、中年男性と若年女性の会話が1組)、計210分のデータである。(47)は中中年男性の会話から、(48)は中中年女性の会話から取った断片である。

日本語訳

1. O ng, 私は今年はね、去年よりましになった気がする。たぶんちょっとは大人になった、だろう[ね。
2. W [ng ng
3. O 勉強に力を入れるようになった。
4. W ng : [:-
5. O [昔は、
6. W ng
7. O 頭はいいけど、全然頑張らなかった。
8. W ng
9. →O 最近はずと頑張っている、ng.
10. →W 私はやはり子供たちにスマホをあまりいじらせないようにした方がいいと思う。

(48) 窓のガラスを拭いた

1. W 咱这辈儿人哪，有点儿意思。
2. O ng
3. W 现在又：(.)又又伺候小的，
4. →O 可：不[是。
5. W [过去伺候老的。
6. →O 对对对对。
7. →W 年前那个玻璃，那都是：：我们儿子那边儿都我擦的，a.
8. →O 你看。

日本語訳

1. W 私たちの世代の人は、ちょっと面白い。
2. O ng
3. W 今は：また(.)またまた下の世代の面倒を見て、
4. →O 確かに。
5. W [昔は上の世代の面倒を見ていた。
6. →O そうそうそうそう。
7. →W お正月のガラス、それは全部：：息子の家の窓のガラスは全部僕が拭いた，a.
8. →O ほら。

(47)では話し手Oは聞き手Wに対して自分の孫について話している。Oは、1行目から自分の孫は昔から賢く、あまり勉強しなかったが、今年になってきちんと勉強するようになったと言っている。9行目でOは「(自分の孫は)最近はずと頑張っている、ng」と言って自らの発話を終了させ、10行目でWはターンを取り、自分のスマホに対する意見を述べている。Oの発話の途中、Wは明確な意見を示さず、「ng」だけで相づちを打っている。

(48)で話し手Wと聞き手Oが自分たちの世代はいつも人の面倒を見ているという話題について話している。Wが自分の意見「私たちの世代の人は昔上の世代の面倒を見て、今は下の世代の面倒を見ている」を述べている途中で、Oは「確かに」「そうそうそうそう」などの発話でその意見に対する賛意を表している。このように、6行目が終了した時点で、2人の話者がそれ以前のやり取りでお互いの意見が一致していることを知っているということになる。その後の7行目でWは「お正月の前に息子の家のガラスを全部拭いた」というエピソードを語り、発話の末尾に「a」を発した。さらに8行目でOは「ほら(そうなるよね)」と共感を示した。

この2例の「ng」「a」の現れ方、そして対話相手とのやり取りからすると、(47)では話し手Oと聞き手Wの考え方が一致しているかどうかは判断しにくい、(48)で話し手Wと聞き手Oの考え方が一致していることは判断できる。また、(42)(46)で「a」は、話者が「自分の発話が真であること」「対話相手もそのように思っていること」を確信しなければ発せられないという点からすると、(48)で話し手Wが「a」を発することで、聞き手Oと同様な認知状態を持っていることが明確に示されるであろう。

以上の考察から、発話の部分的、全体的な末尾に現れる「うん」「はい」「ng」「a」の共通点と相違点を明らかにした。共通点は、「うん」「はい」「ng」「a」のいずれも話者の心内にある情報の取り出しの部分的、全体的完結を示すことができることである。相違点は、以下の2点である。1つは、「はい」だけが、ビジネスなどの正式な場面で発せられ、「真摯な態度」を示すことができる点である。もう1つは、「a」だけが、話者が「自分の発話が真であること」「対話相手もそのように思っていること」を確信しなければ、発せられにくいことであり、発話の末尾に「a」が現れると、対話相手と同様な認知状態を持っていると示す点である。

3.3 感動詞としての「うん」「はい」「ng」「a」の共通点と相違点の考察

第3.1節、第3.2節からの観察を通して、現代日本語と現代中国語の天津方言の会話で数多く打たれる相づちの「うん」「はい」「ng」「a」のそれぞれの感動詞としての特徴を明らかにし

た。観察の結果から、それぞれの感動詞の共通点と相違点が解明された。

この4つの感動詞の共通点是对話場面で発せられる点である。相違点は、まず、「うん」「はい」「ng」は独り言として発せられるが、「a」はそうではない点である。また、肯定応答として発せられる際には、「うん」「はい」「ng」は単なる命題の真偽の判断や、誘い・請求に対する承諾になるが、「a」が発せられる際は「その情報は共有しているはず」といった強い気持ちでなければ不自然である。さらに、発話の末尾で発せられる際に、「自分の発話が真である」「対話相手もそのように思っている」という条件が満たされなければ不自然である。これらの違いから、「うん」「はい」「ng」と「a」は、分けて検討する必要があると言えよう。

まず、感動詞としての「うん」と「はい」の「本質」について、富樫(2002)は次のようにまとめている。

- (49) 「はい」「うん」の情報源が、相手の発話に限られるのではなく、(相手の発話も含めた状況・文脈から)話し手¹¹⁾自身が何らかの情報を得た時点の反応と捉えることができる。「はい」「うん」発話の前提として、「聞き手」¹²⁾の存在を特別視して設定することは難しいといえる。聞き手は(話し手にとって)情報の出所の一つに過ぎない。話し手が情報をどう処理するのかということと、その情報の出所がどこかということは、一旦、切り離して考えていかなければならない。したがって、「はい」「うん」の本質を心的操作の標識、話し手の心内における情報処理を示すものとして位置付けることができる。 [富樫2002: 144]

富樫(2002)の議論からすると、「うん」と「はい」は、何らかの情報と遭遇した際の、あるいは心内にある何らかの情報の取り出しが完結した際の、処理のみを示すものであり、本質的には対人的な感動詞ではないことが言える。本稿の第3.1節、第3.2節の検討結果も同様な結論に導かれた。第3.1節で、各感動詞の独り言として用法を観察することで、「うん」「はい」は独り言として様々な場面で発せられることを明らかにした。第3.2節で、各感動詞の対話場面の用法を考察し、「うん」「はい」は相手が言及した情報が「共有しているはずの情報」であるかどうか、すなわち新情報、旧情報に関わらず応答でき(第3.2.1小節)、自らが提供する情報が確立した情報と確立していない情報を問わず発話末尾に発せられる(第3.2.2小節)ことが確認できた。すなわち、「うん」と「はい」は、他者と共在する際にも発せられるが、話者が新・旧、確立・未確立の情報を処理する際に発せられるものであり、根本的には自己志向的である。この点について、「うん」「はい」と類似した用法がある「ng」も同様だと

11) この引用文における「話し手」とは、感動詞を発する話者のことを指している。以下同様。

12) この引用文における「聞き手」とは、感動詞を受ける人のことを指している。以下同様。

推測できる。

「うん」と「はい」の違いについて、先行研究と本稿の検討から、独り言としての用法について、「うん」は「はい」より発せられる場面が多く、対話場面の用法について、「はい」は「うん」より話者の自信の度合の高さや、「実行の約束」のありかを反映し、より正式な場面で発せられることが分かった。この点からすると、「はい」は「うん」より、対人的な側面が強いと言える。一方、「ng」は「うん」「はい」と同じ類のものだが、待遇性などに関わらないため、状況によって「うん」と「はい」両方に対応することが可能である。

以上の考察から、「うん」「はい」「ng」は、一部の場面において対人的な側面などで異なっているが、話者の新情報あるいは旧情報との遭遇、心内で確立あるいは未確立の情報の取り出しといった認知状態の調整が行われた際に発せられるという点で共通していると言えるであろう。それに対して「a」はこの3つの感動詞と異なっている。第3.1節で、「a」は独り言として発せられないことが分かった。第3.2節で、対話場面において、「共有しているはず」の旧情報に対する応答(第3.2.1小節)や、自らが提供する情報は心内で確立した情報(第3.2.2小節)でなければ発せられないことを明らかにした。このことから、「a」は(新情報でなく)旧情報との遭遇、(未確立の情報でなく)確立した情報の取り出しといった認知状態の調整が行われた際に発せられ、さらに他者志向的であるため、その認知状態を明確に示し、表面化する語用的効果があると言える。

4. 相づちとしての用法

4.1 相づちとして「うん」「はい」「ng」「a」に関する考察

前節では感動詞としての日本語の「うん」「はい」、天津方言の「ng」「a」の共通点と相違点を考察した。この節では、その考察の延長線上にある、相づちとしての「うん」「はい」「ng」「a」の共通点と相違点を総括する。

第1節で言及したように、「うん」「はい」「ng」「a」のいずれも話し手が発話している途中、聞き手が発することができる。その場合、話し手の発話が統語的・意味的にまとまっていなくても特に不自然ではない。次の(50)~(53)は、話し手Aが新規話題を開始しようとする際の会話の作例である。

- (50) A: 私の学校でね、もう喫煙が全面禁止になってね、…
 B: うん うん
- (51) A: 私の学校でね、もう喫煙が全面禁止になってね、…
 B: はい はい
- (52) A: 我们学校呀, 已经全面禁烟了, 所以……
 私の学校でね、もう喫煙が全面禁止になってね、…
 B: ng ng
- (53) A: 我们学校呀, 已经全面禁烟了, 所以……
 私の学校でね、もう喫煙が全面禁止になってね、…
 B: a a

話し手Aが発話している途中に、聞き手は(50)では「うん」、(51)では「はい」という相づちを打っている。この場合の「うん」と「はい」の区別は先行研究の知見によれば以下の3つにまとめられる。「はい」が打たれる場合、①会話の場面はより正式である(水野1988；中島2011)；②聞き手は話し手の発話内容に対して興味がある(富樫2002)；③聞き手は話し手によって言及された内容により多くの情報量を持っている(富樫2001, 2002)。

また、「ng」と「a」には、「うん」と「はい」のような待遇性の違いがなく、「ng」は「うん」と「はい」のいずれにも対応することが可能である。一方、「a」が発せられる際に、①聞き手は話し手の発話内容の展開により把握できていると判断される；②「催促」という言語行動を果たしている。この結論は、収集したデータで次の(54)と(55)¹³⁾で検証することができる。

(54) 孫の放課後

1. O 我们哪, 我们这孙子今年上初中, 这功课不紧点儿吗,
2. →W ng
3. O 原先也像您那样儿似的, 都上我这吃饭来
4. →W ng
5. O 吃完饭三口叭里咕噜走了,
6. →W ng
7. O 是:, 走了. 这小不点儿进门儿::, 看报, 对吧?
8. →W ng
9. O ng是::得弄手机,
10. (0.6)

13) (54)は中高年男性の会話から、(55)は中高年女性の会話から取った断片である。

11. →W ng
12. O 帶上廁所,
13. →W ng
14. O 诶折腾折腾, 到点吃饭了.
15. →W ng
16. O 你说吃完饭能走吗马上, 再冲着风呢,
17. →W ng
18. O 待一小时吧, 耽误工夫. 看到现在怎么办, 就叫他们啊, 下学直接回家.

日本語訳

1. O 僕たちはね, 僕のこの孫は今年になって中学校に進学して, 勉強が忙しくなっ
たじゃないですか,
2. →W ng
3. O もともとそちらと同じく, 家族全員は僕の家にご飯を食べに来てた.
4. →W ng
5. O ご飯を食べたら急いで彼らは自分の家に帰っていく.
6. →W ng
7. O は:, 帰っていく. 孫はうちに来たら::, 新聞を読む, だろう,
8. →W ng
9. O ngは::携帯をいじって,
10. (0.6)
11. →W ng
12. O そしてトイレに行って,
13. →W ng
14. O そういろいろやっているうちに, 御飯の時間になる.
15. →W ng
16. O 食べたらすぐ帰っていくわけある? 風邪をひいてしまうだろう,
17. →W ng
18. O 一時間待つのも, 時間の無駄だ. じゃどうしようかと考えて, 放課後直接彼ら
の家に帰るようにさせた.

(55) 目眩

1. R 哎哟:我告您没把我给[晕死,
2. L [结果哪您(.)啊:::[照相去了?

3. R [一回来, 我就(.)我就不能这么回头儿,
 4. →L a [:
 5. R [这么回头儿就能把我给晕死
 6. →L ng
 (86行省略)
 92. R 两个眼儿不能睁, [只能闭一个眼[才能拐这个弯儿, [你知道吗?
 93. →L [a : [a [结果哪? 去了?
 94. R 上医院啦[:.
 95. →L [a :

日本語訳

1. R おや.:教えるけど目眩で死にそう[になった,
 2. L [結局あなた(.)a : : [X射線を撮りに行った?
 3. R [帰ってきたら, 私は(.)私は首をこう回すことが
 できなくなった。
 4. →L a [:
 5. R [こう首を回すだけで目眩で死にそうになった,
 6. →L ng
 (86行省略)
 92. R 両目を開くことができない, [片目を閉じないと[体を回すことができない, [分かる?
 93. →L [a : [a [結局は? 行った?
 94. R 病院に行ったよ[:.
 95. →L [a :

(54)も(55)も話し手の体験談である。(54)の話し手Oは自分の孫が自宅に晩御飯を食べに来た際のエピソード、(55)の話し手Rが目眩で病院に行ったというエピソードである。この2つの例を観察すると、(54)の聞き手Wは「ng」という相づちだけを打っており、明確な態度は示さなかったが、(55)の聞き手Lは「a」を打つことが多く、さらに93行目で相づち「a」を2回連続に発した後、話し手のターンの終了を待たずに「結局は? 行った?」と、相手に話の続きを催促したことが分かる。

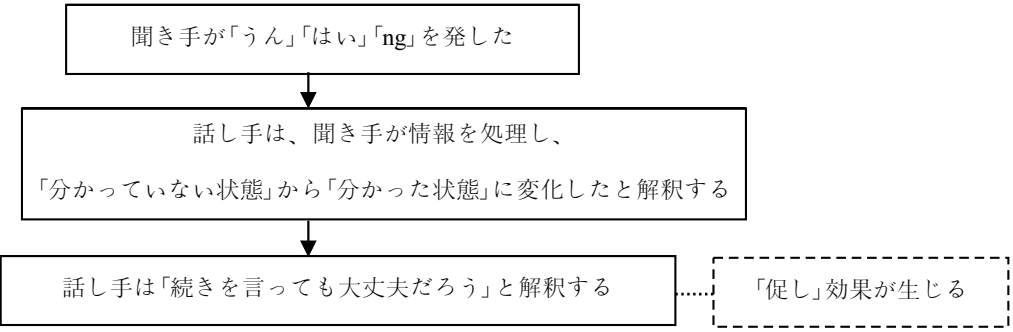
会話の流れを見ると、(54)と(55)において、それぞれの聞き手が話し手の発話内容を把握する程度も異なっていると考えられる。(54)で話し手Oは、聞き手Wが詳しく知らない自分の孫の生活について語っており、体験談の最中に情報の重複は一度もない。従って、聞き

手のWが受け取ったのは、ほぼ完全な新情報と言える。それに対して、(55)の場合、話し手Rが提示した情報に重複する部分がある。話し手Rは体験談の始まりに「目眩で死にそうになった」という情報を聞き手に提示し、その後の情報と関連性の高い「目眩で首や体を回すことができない」「両目を同時に開くことができない」ことも話した。(55)の聞き手Lは、体験談の途中、新情報だけでなく、旧情報も一部受け取ったと分かる。

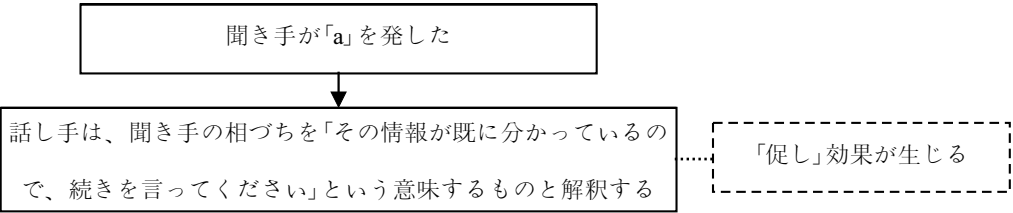
第3.3節で各感動詞の用法をまとめる際に、話者が新情報あるいは旧情報と遭遇した際に、「ng」は発せられるが、旧情報と遭遇した際にしか、「a」は発せられないということを論じてきた。(54)(55)の観察により、相づちとしての「ng」「a」の用法はその結論と一致していることが分かった。聞き手は話し手が提供する情報を把握できていない際に、すなわち完全な新情報の場合に相づち「ng」が多用され、話し手が提供する情報がある程度把握できている際に、すなわち旧情報が含まれる場合に相づち「a」が多用されるということが言えよう。

また、相づちの「ng」と「a」の、「促し」効果が生じるメカニズムも異なっている。「ng」は自己志向的であるため、相づちとなる際には「情報(新・旧に関わらず)を受け取った」という認知状態の調整を反映するものであり、直接に対話する相手に働きかけるものではない。従って、話し手(すなわち相づちの受け手)が「ng」を受けた際に、「ここまでは大丈夫、話を続けてください」という「促し」効果を感じ取れるのは、自ら提供した情報によって相づちを打った人が「分かっていない状態」から「分かった状態」へ変化しただろう、という話し手自身の推測によるものである。この場合の「促し効果」は、あくまで話し手の「二次的解釈」の産物である。「ng」と同じ類の「うん」「はい」もそうである。それに対して、「a」は、他者志向的であるため、旧情報の受け取りだけにとどまらず、「その情報は既に分かっているので、続きを言ってください」ということを直接に対話する相手に働きかけてあからさまにし、「催促」の言語行動を達成する¹⁴⁾。以下の図1と図2は、相づちとしての「うん」「はい」「ng」と「a」による「促し」効果が生じるメカニズムの相違点を示している。

14) 話し手が提供した情報が旧情報の場合において、聞き手が「うん」「はい」「ng」を打つこともできる。その場合は、聞き手が「その情報を受け取る前に既に分かっている」ということをあからさまにしないだけである。



<図1> 相づちとしての「うん」「はい」「ng」による「促し」効果が生じるメカニズム



<図2> 相づちとしての「a」による「促し」効果が生じるメカニズム

さらに、「うん」「はい」「ng」による「促し」効果は、韻律によって変わってくる。例えば、話し手の発話を聞いて、発せられる非常に緩やかな下降調の「うーん」に比較して、下降調の短い「うん」の方が「促し」効果が強い。これは、「はい」と「ng」にも当てはまる。一方、「a」は、韻律が多少変わっていても、「促し」効果の強さの変化はない。

4.2 なぜ天津方言の相づち「a」は「促し」効果が消失しないのか

第1節で提示した問題に戻るが、なぜ非常に早いタイミングで高頻度で打たれる日本語の相づち「はい」は「促し」効果が消失し、天津方言の「a」はそうならないのであろうか。本稿冒頭で提示した例(56=3)をもう一度振り返ってみよう。

- (56) (3)再掲 相手の発話を早く終わらせたい際
A：私がここまで成功したのは、学生時代からの努力と…
B： はい はい はいはい はい

第3.3節で示した通り、「うん」「はい」「ng」は自己志向的で、直接に対話する相手に働きかけるものでなく、話者自身の認知状態の調整を反映するものである。金田(2015)によると、これらの相づちが発せられた時点で、情報の受け取りが話者の心内で一旦終了し、「文脈の断絶」が起こる。

また、前節で論じたように、「うん」「はい」「ng」が相づちとして発せられる際に、その「促し」効果は、韻律によって変わってくる。「適切な」韻律で発せられれば、会話の聞き手の「その情報を受け取った」という認知状態の調整を反映することになる。これによって、軽い程度の「文脈の断絶」が起こり、「そこまで分かった。続けてください」という「促し」効果が生じる。

だが、(56=3)の「はい」は、富樫(2002)によれば、韻律的にも非常に特徴的である。この場合の「はい」は、1回で発せられる際に、継続時間が短く、イントネーションが平板である。また、「はいはい」のように繰り返して2回発せられる際に、後の「はい」の方が、ピッチの開始点が高く、「低い山→高い山」(富樫2002)というイントネーションパターンを成している。このイントネーションパターンは、「無愛想」など聴覚印象を招くことがある。このような韻律は、「うん」と「ng」では作れない。

(56=3)のように、「無愛想」な韻律で打たれる「はい」が頻繁に発せられると、高程度の「文脈の断絶」が起こり、「促し」効果が消失し「あなたが言っていることは分かっている」という早めに発話を終了させる印象に結びつく。

一方、「a」も「あなたが言っていることは分かっている」という印象をもたらすが、なぜ「促し」効果は消失しないのであろうか。その理由は2つある。1つは、「a」の「促し」効果が生じるメカニズムは、(「うん」「はい」「ng」のように)「二次的解釈」によるものではなく、それ自身が帯びている性質から生じることである。「a」は旧情報の受け取りを示すことができるが、他者志向的、すなわち直接に対話する相手に働きかけるものであるため、「文脈の断絶」にならず、「それで? 続きは?」というニュアンスも含まれる。もう1つは、前節で述べたように、「a」は韻律が多少変わっても、「促し」効果の強さが変わらないことである。この2点を合わせると、「a」は「はい」と同様に「あなたが言っていることは分かっている」という印象をもたらすが、「はい」のような「もう聞き飽きた。これ以上聞きたくない」という「食い気味」の印象ではなく、「そこまで分かっているので、早く話の続きを聞きたい」というニュアンスを持ち、「催促」という言語行動を達成する¹⁵⁾。

15) 中国語で「もうこれ以上聞きたくない」ことを表す際に、「好了好了(haolehaole)」「行了行了(xinglexingle)」(日本語訳:「もういいよ」)等の表現を発することが多い。

5. おわりに

本稿では、日本語と中国語の天津方言の応答系の感動詞「うん」「はい」「ng」「a」に焦点を当て、それぞれの感動詞が相づちとなる際に「促し」効果が消失するか否かを出発点として調査を行った。調査に際して、各感動詞の独り言としての用法と対話場面における用法を先行研究と内省で考察した。その結果、「うん」「はい」「ng」は強い自己志向性を持っており、話者の新・旧情報との遭遇、確立・未確立の情報の取り出しといった認知状態が行われた際に発せられることが分かった。それに対して「a」は他者指向性しか持っておらず、(新情報でなく)旧情報との遭遇や(未確立でなく)確立した情報の取り出しといった認知状態の調整が行われた際に発せられると結論付けられた。

さらに、相づちとしての「うん」「はい」「ng」「a」の用法に関する観察により、「促し」効果が生じるメカニズムを明らかにした。「うん」「はい」「ng」の「促し」効果は、相づちの受け手の二次的解釈によって生じるが、「a」の「促し」効果は、それ自体が帯びている性質によって生じることが分かった。最後に、「促し」効果が生じるメカニズム、そして韻律の特徴を考察することで、本稿の問題意識：なぜ「はい」が頻繁に発せられると相づちの「促し」効果が完全に消失し、「食い気味」の印象が生じる一方、天津方言の「a」はそのような印象が生じないかを解明した。

【書き起こしの記号】

- [複数の参加者の発する音声が重なり始めている時点
- (m.n) 音声途絶えている状態があるときの秒数
- (.) 0.2秒以下の短い間合い
- 言葉: 直前の音が延ばされていること(コロンの数は引き延ばしの相対的な長さ)
- , 発話の語尾の音が少し下がって弾みがついている箇所
- . 発話の語尾の音が下がって区切りがついた箇所
- ? 発話が質問文であることを示す
- 「ここで特に注目すべき」ことを示す

【参考文献】

- 金田純平(2015)「文末の感動詞・間投詞―感動詞・間投詞対照を視野に入れて」友定賢治編『感動詞の言語学』ひつじ書房、pp.15-37

- 定延利之(2002)『『うん』と『そう』に意味はあるか』定延利之編著『『うん』と『そう』の言語学』ひつじ書房、pp.75-112
- 富樫純一(2001)「情報の獲得を示す談話標識について」『筑波日本語研究』6、pp.19-41
- _____(2002)『『はい』と『うん』の関係をめぐって』定延利之編著『『うん』と『そう』の言語学』ひつじ書房、pp.127-157
- 中島悦子(2011)『自然談話の文法—疑問表現・応答詞・相づち・フィラー・無助詞』おうふう
- 水谷信子(1988)「あいづち論」『日本語学』7(12)、pp.4-11
- 水野義道(1988)「中国語のあいづち」『日本語学』7(13)、pp.18-23
- メイナード・K・泉子(1993)『会話分析』くろしお出版
- 森山卓郎(1989)「応答と談話管理システム」『阪大日本語研究』1、pp.63-88
- 羅希(2016)「中国の北京・天津方言話者のコミュニケーション行動に関する一観察」『社会言語科学会第38回大会発表論文集』、pp.66-69
- _____(2017)『『感じの良さ・悪さ』に着目した相づちの研究—現代日本語と現代中国語の対照を通して』神戸大学博士論文
- 劉潔・大橋真(2010)「会話におけるあいづちの日中比較、あいづちの頻度から見る日中比較文化論的考察」『言語文化研究』18、pp.131-142
- 劉建華(1987)「電話でのアイズチ頻度の中日比較」『言語』16(21)、pp.93-97
- 劉丹丹(2013)「勧誘会話における日本語の『うん』と中国語の『嗯』の使用について」『日本語・日本文化研究』23、pp.106-117
- 呂萍(2010)「中日語の電話による会話におけるあいづちの使用頻度と出現位置に着目して」『国際文化研究』16、pp.109-121
- Clancy, P., Thompson, S., Suzuki, R. & Tao, H. (1996) The conversational use of reactive tokens in English, Japanese and Mandarin, *Journal of Pragmatics*, 26, pp.355-387
- Yngve, V. (1970) On getting a word in edgewise, *Papers from the Sixth Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society*, 567-577

謝辞

本稿は2017年2月、神戸大学に提出した博士論文の一部を修正、加筆したものである。論文作成に当たりご指導を賜った京都大学の定延利之教授、県立広島大学の友定賢治教授、立命館アジア太平洋大学の金賛會教授に深く感謝の意を表したい。また、たくさんのアドバイスをくださった神戸大学の院生宿利由希子氏、北京外国語大学の院生揣迪之氏に心よりお礼を申し上げたい。

本研究は、日本学術振興会の科学研究費補助金・特別研究員奨励費(課題番号16J02620、課題名：状況に埋め込まれた相づちのタイミングと韻律)の支援を受けて実施された。ここに記してお礼を申し上げたい。

논문투고일 : 2017년 12월 21일
 심사개시일 : 2018년 01월 16일
 1차 수정일 : 2018년 02월 12일
 2차 수정일 : 2018년 02월 16일
 게재확정일 : 2018년 02월 19일

<要旨>

相づちの「促し」効果の消失について

－ 現代日本語の「うん」「はい」と現代中国語の天津方言の「ng」「a」の比較から －

羅希

本稿では、日本語と中国語の天津方言の応答系の感動詞「うん」「はい」「ng」「a」に焦点を当て、それぞれの感動詞が相づちとなる際に「促し」効果が消失するか否かを出発点として調査を行い、「促し」効果が生じるメカニズムを明らかにした。調査の結果、「うん」「はい」「ng」は強い自己志向性を持っており、話者の新・旧情報との遭遇、確立・未確立の情報の取り出しといった認知状態が行われた際に発せられることが分かった。それに対して「a」は他者志向性しか持っておらず、(新情報でなく)旧情報との遭遇や(未確立でなく)確立した情報の取り出しといった認知状態の調整が行われた際に発せられると結論付けられた。相づちとしての「うん」「はい」「ng」「a」の用法に関する観察により、「うん」「はい」「ng」の「促し」効果は、相づちの受け手の二次的解釈によって生じるが、「a」の「促し」効果は、それ自体が帯びている性質によって生じることが分かった。

The disappearance of backchannel's “continuer” effect

－ A comparison between “un” and “hai” of Japanese language and “ng” and “a” in Chinese, Tianjin dialect －

Luo, Xi

This paper investigates interjections “un” and “hai” of Japanese language and “ng” and “a” of Chinese, Tianjin dialect, and discusses whether the effect as “continuer” disappears or not when they are uttered as backchannels. I found that “un”, “hai”, and “ng” are self-oriented interjections, uttered when one received a piece of new or old information, as well as after sending a piece of convictive or unconvictive information. On the other hand, “a” is an other-oriented interjection, uttered only when one received a piece of old information or after sending a piece of convictive information. Then through an observation of the use of “un” “hai” “ng” “a” as backchannels, I proved that the mechanism of having a “continuer” effect may differ between “un” “hai” “ng” and “a”, as the former's derives from a secondary interpretation by the receiver of the backchannel, while the latter's is from its inherent character.